

協同学習の実践に生きるプロジェクトアドベンチャーの 考え方と手法

寺中祥吾（プロジェクトアドベンチャージャパン）

キーワード：プロジェクトアドベンチャー（PA）、体験学習、ファシリテーション、PAと協同学習の相補的实践

1. 企画趣旨

本ワークショップは、プロジェクトアドベンチャー（以下、PA）の考え方と手法を活用し、協同学習場面における学習者の協同と学習効果を高めるための実践について学び合うことを目的とする。

協同学習の実践者から、学習者の中に協同が生まれるまでに苦心をした経験を見聞きすることが少なくない。企図した通りに協同的な学びが起こることのほうが少ないと言ってもよいだろう。その際に、原因を自身の授業や関わりに求めて苦しんだり、学習者の能力に求めて「協同学習はまだ早い」と講義形式の授業に限ってしまったりすることもあるように思う。もしかすると、学習者にもう少しの協同する力があれば、学習者が協同する価値や楽しさを知っていれば、授業者としての私たちが学習者の協同する力を信じられたら、この難しさを越えられるかもしれない。PAと協同学習の相補的实践は、このような可能性をもっていると思う。

ワークショップでは、実際にPAプログラムを体験し参加者同士の関係性を築く中で、そこで起こる体験や得られる気づき・学びが、協同学習場面にどのように活用できるか、について考えたい。

2. プロジェクトアドベンチャーとは

PAは、アウトワードバウンドスクール（OBS）というロッククライミングや海・山への遠征などの活動を利用した冒険学校の考え方を学校教育の中に持ち込むために、1971年にアメリカの高校で始まった。その後、学校教育はもとより、カウンセリングや矯正教育、企業やスポーツ分野など様々な分野に援用されている。1995年にプロジェクトアドベンチャージャパンが設立され、日本における実践とプログラム開発を担っている。

現在、学校教育の分野では「仲間づくり」の手法として知られている側面もあるが、PAプログラムの主たる目的は「肯定的な自己概念の形成」である。その目的に向かって「信頼関係の確立」を基本的な構成要素としてプログラムを立案する。つまり、グループの信頼関係は、グループの成員一人ひとりの成長の手段である。

学校教育の場では、PAの考え方や指導法（ファシリテーション）を援用したり、PAの活

動（アクティビティ）を実践したりする中で、児童・生徒自身が自分たちでクラスの人間関係をつくる実感を持ちながら、一人ひとりの成長につながる挑戦を促進する。ここで言う挑戦とは、野外をフィールドに行うような身体的に負荷の高い挑戦ではなく、他者と関わり合ったり自分自身の内面と向き合ったりするような心の冒険も含まれている。

3. PAと協同学習の相補的实践

協同学習にPAの考え方と手法を取り入れることで生まれる可能性のある相補性について、いくつか紹介する。

①協同の価値を体感する

PAは課題解決型のアクティビティが多く、さらに課題達成までのプロセスは多様さが担保されている。そのため、課題に向かう中での協同が生まれやすく、課題の達成・未達成というフィードバックがあるため、今この場に必要ない協同性について考えやすい。その結果、「みんなでやると、できないと思ったことができるんだ」という成功体験が得やすいようにデザインされている。PAアクティビティを通して、協同する価値が体感されていることで、協同学習場面においても関わり合いにつながるのではないかと。

②ふりかえりによる改善手続きをトレーニングする

PAは、実際に起こった出来事を気づきや学びの素材にする体験学習としての学習プロセスを踏む。よって、ふりかえることで気づきや学びを獲得することが学習の核にあり、プログラムを通してふりかえりによる学びに習熟していく過程を歩む。このふりかえる力は、協同学習場面において、ふりかえりによる改善手続きによって学習内容の獲得と協同の質を向上していくために大きな意味を持つ。

③協同する楽しさを体感する

PAアクティビティは、身体を動かし感情を扱いながら、楽しいと感じられること、楽しむために必要なことを大切にしている。その中で、「みんなと一つのことに向かうのって楽しい」「サポートをすること、受けることってうれしい」という感情が生まれる。この気持ちが集団に共有されていると、自然な協同が生まれる。

4. ワークショップで目指すこととその進め方

本ワークショップでは、以下の二点を目標としてワークショップをすすめる。

- ・PAで用いている活動（アクティビティ）の体験と、背景となる考え方のレクチャーを通して、PAについての理解を深めること
- ・PAの体験や考え方を、教室での協同的な学習場面につなげるためのアイディアを整理すること

以上のことを目指して、上記の相補性に捉われない気づきを見出せるワークショップとしたい。